

# On the Notion of the God's Soul in the Theory of Heraclitus : From the Viewpoint of Heraclitus' Theory of soul

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/17142">http://hdl.handle.net/2297/17142</a>

# ヘラクレイトスにおける神の魂の概念について

## ～ヘラクレイトスの魂論の観点から～

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

山田 哲也

### On the Notion of the God's Soul in the Theory of Heraclitus ~From the Viewpoint of Heraclitus' Theory of Soul~

YAMADA Tetsuya

#### Abstract

In this paper, I'll show the similarity between fire and soul in Heraclitus' Theory, and find what the God's soul which Heraclitus thought is, based on the similarity.

In the saying of Heraclitus, fire has the name of logos. Logos, in Heraclitus' theory, means the oneness of contrasting contents which is symbolized by lyre or arrow. In fact, Heraclitus thought the fire is homeostatic and has two contrasting contents, flare and extinguishment. It means that Heraclitus' fire is symbolic of the oneness of contrasting contents. And, Heraclitus thought human soul has two contrasting conditions, drying and moistening, and the drier human soul is superior to the moister soul in all aspects. Fire and human soul both have two contrasting contents in it. Therefore, I think it is not impossible to find similarity between the two.

In addition, Heraclitus said what human beings ought to be is to follow the universal thing. The universal thing is the fire and to follow the universal thing means to follow the fire. Strictly speaking, in this case, to follow the fire means to follow the situation of flare in two contrasting contents which fire has. In human soul, to follow the flare is that the soul is dry. But in Heraclitus' theory, the thing, like lyre and arrow, which has two contrasting contents break, if the one of the two contrasting contents makes up 100% and overpower the other. In sum, perfect dry condition of human soul brings down the crash of human soul, though dry condition is what human soul ought to be.

Here is the point to find the God's soul in Heraclitus' theory. I attempt to interpret the perfect dry condition of soul which is unrealizable in human soul as what the God's soul is.

#### Key Words

Heraclitus, soul, fire

#### 序、本論の意図と議論全体の概観

周知のように、ヘラクレイトスは自然万有に遍く行き渡る原理として「火」という要素を設定していたが、本論の目的は、この原理である「火」

と人間の「魂」との間にヘラクレイトスが一定の類似性を読み込んでいたことを明らかにし、この「火」と「魂」の類似という観点から、ヘラクレイトスの魂論の中に、人間を超越した「神が有する魂のあり方」を読み込むことである。具体的な

議論は本文を参照してもらいたいが、理解の便宜を図るため、ここで本論の議論展開を大まかに概観しておこう。

ヘラクレイトスにおいて「火」には「ロゴス」という名前が与えられており、このロゴスの内実は「豎琴」や「弓」が象徴的に表す「対立物の一致」を意味するものであった。実際、ヘラクレイトスの提示する「火」は「定量だけ燃え」また「定量だけ消え」ながらも「常にある」ものとされ、「炎上」と「鎮火」という相対する状態をその内に抱えながらも恒常的にあり続けるものとされていたのだが、このことは、ヘラクレイトスが提示した「火」の概念は「対立物の一致」を体現するものであったということの意味している。また、ヘラクレイトスはこのような「火」の概念を提示すると同時に、人間の魂の状態として「乾燥」と「湿潤」という二通りのあり方を認め、「乾燥」の状態を魂のよりよいあり方として規定し、乾燥していれば乾燥しているほど魂はその機能を十全に発揮できると考えていた。一方の「魂」は「乾燥」と「湿潤」という対立関係を内包しており、もう一方の「火」は「炎上」と「鎮火」という対立関係を内包している。この両者の間に類似関係を見出すことは不可能ではないだろう。

また、ヘラクレイトスは人間のよきあり方として、個別的なものに従うのではなく「遍くもの」に従うことを提示していた。ここでいわれている「遍くもの」とは「火」のことを意味しており、この「遍くものに従う」とは「火」に従うということ、言い換えるならば、「火的にあること」を意味していた。つまり、ヘラクレイトスは人間のあり方、より厳密には、人間の魂のあり方として「火的にあること」をよしとしていたのだが、この「火的にあること」とは先に示した「炎上」と「鎮火」という対立関係においては、「火」が火としてある「炎上」の状態に従うことを意味していた。人間の「魂」において「火」の「炎上」状態に従うとは、そのあり方として「乾燥」という状態にあるということであるが、ヘラクレイトスにおいて「対立物の一致」を有しているものは、そ

れが「豎琴」や「弓」という比喻で象徴されていたように、対立するもののどちらか一方の力が100になりもう一方が0になった場合、それはそのまま、その「対立物の一致」を有しているものの崩壊を意味していた。つまり、いかにそれが魂にとってよき状態を意味する「乾燥」状態であっても、完全に乾燥するのであれば、「魂」は存在することができないのである。

ここに、ヘラクレイトスの魂論に「神が有する魂のあり方」を読み込むことの可能性が見出せる。つまり、ヘラクレイトスの魂論において想定可能な人間の魂によっては実現不可能なよきあり方、すなわち、魂の完全な乾燥状態を「神の魂」として解釈するということである。

## 1、ヘラクレイトスにおける「火」の概念

ヘラクレイトスに限らず、ソクラテス以前の人々が展開する学説に言及する際には、その学説にどのような観点から切り込んでいこうとも、個々の人々が定める自然万有の究極的な原理について言及しその基本的な性格を理解しておくことが不可欠になる。本節では、ヘラクレイトスにおいてその究極な原理とみなされている「火」について、それがどのようなものであるのかを特定する。

DK22B30 (クレメンス『雑録集』V 105) 一部筆者訳

万人にとって同一のものであるところの、このコスモスは (*κόσμον τόνδε*)、神々のどなたかが造ったのでもないし、人間のだれかが造ったのでもない。それは、いつも生きている火として、いつでもあったし、現にあり、またありつづけるであろう——定量だけ燃え、定量だけ消えながら。"

DK22B63後半部、DK22B64 (ヒッポリュトス『全異端派論駁』IX 10)

しかし、彼はまた、世界およびその内なるすべてのものの審判が火によっておこなわれる、とも述

べている。彼の言によれば（以下 DK22B64）「万物を雷電（*Κεραυνός*）が舵取る」すなわち導く、とされる。「雷電」とは永遠の火のことを言っているのである。彼はまた、この火が知性を有しており、世界総体を支配する原因であるとも言っている。

まず、DK22B30に目を向けてみると、そこでは一般に「秩序（order）」や「世界（world）」「万有（universe）」という仕方で訳される *κόσμος* に焦点が当てられ、その *κόσμος* が「火としてある」ということがいわれている。続いて、DK22B63をみてみると、そこでは、「雷電（*Κεραυνός*）」という概念が提示され、それが「火」と同一視されると同時に、「世界総体を支配する原因」とみなされている。それゆえ、この段階で「火」には「コスモス」と「雷電」という二通りの名前が与えられ、なおかつ、それが「世界総体を支配する」という仕方で特徴付けられているということがいえよう。

DK22B89（プルタルコス『迷信について』3p. 166C）一部筆者訳

ヘラクレイトスは言う。「目覚めている者たちには共通の一つのコスモス（*ἓνα κοινὸν κόσμον*）がある」が、眠っている者たちは、それぞれが「自分だけの」コスモスへと帰っていく。

DK22B 2（セクストス・エンペイリコス『諸学者論駁』VII 133）

それゆえ、遍きもの（*ξυνώϊ*）すなわち共通なもの（*κοινώϊ*）に従わなければならない。しかるに、この理（*τοῦ λόγου*）こそ遍きもの（*ξυνού*）であるというのに、多くの人びとは、自分独自の思慮を備えているつもりになって生きている。

続いて、上記した二つの断片をみてみると、先にあげた DK22B89では B30において「火」と同一視されていた「コスモス」が「共通の一つの（*ἓνα κοινόν*）」という仕方で特徴付けられている。そ

して、そのことを踏まえて、B2をみてみると、そこでは、「遍きもの（*ξυνώϊ*）すなわち共通なもの（*κοινώϊ*）に従わなければならない」ということが述べられた上で、「理（*λόγος*）」が「遍きもの（*ξυνός*）」であるということがいわれている。この *ξυνός* という形容詞は *κοινός* の古い形式であるから、両者の意味的な相違を読み込む必要はないであろう。また、仮に、ギリシア語の意味としてそこに少々のぶれがあったとしても、B2のギリシア語本文で両者が *τῶϊ* 〈*ξυνώϊ*, *τουτέστι τῶϊ*〉 *κοινώϊ* という仕方で並列表記されていることから、少なくともヘラクレイトスにおいてこの二つの形容詞は同じ意味を持つものとして使用されていたと考えることができるだろう。以上のことを考慮すると、この二つの断片では *κόσμος* と「理（*λόγος*）」が両者ともに「共通なもの」もしくは「遍きもの（*ξυνός*）」という仕方で特徴付けられているということがいえるだろう。そして、このコスモスとロゴスが同じ仕方で特徴付けられているという点と、先に言及した「火」にコスモスという名前が与えられているという二つの点から、ヘラクレイトスにおいて「火」には「ロゴス」という名前も与えられていたと考えることができる。以上のことから、ヘラクレイトスにおいて、「火」は「*κόσμος*」という名で呼ばれると同時に、遍く行き渡って万物を支配するロゴスともみなされていたと結論付けることができるだろう。

DK22B80（オリゲネス『ケルソス論駁』VI 12）戦争（*τὸν πόλεμον*）は遍きもの（*ξυνόν*）であること、正道（*δίχην*）は争い（*ἔρις*）であること、万事は争いと必然に従って（*κατ', ἔρις καὶ χρεῶν*）生ずることを知らなければならない。

さらに、上に引用した真正断片をみてみると、「戦争（*τὸν πόλεμον*）」というものが「遍きもの（*ξυνόν*）」であるといわれ、それと同時に、「争い（*ἔρις*）」こそが「正道（*δίχην*）」であると言われている。先に見たように、ヘラクレイトスにおいてはロゴスが「遍き（*ξυνός*）」という仕方で特徴

付けられていたが、この断片では、「戦争」が同じ「遍き (*ἐξυός*)」という言葉で特徴付けられているのである。ヘラクレイトスにおける「戦争」の概念は、以下の断片を見てもわかるように、

DK22B53 (ヒッポリュトス『全異端派論駁』IX 9)

戦争はすべてのものの父 (*πατήρ*) であり、すべてのものの王 (*βασιλεύς*) である。あるものたちを神々に列し、ある者たちを人間の列に置いた。またある者たちを奴隷とし、ある者たちを自由人とした。

他のもののあり方を規定する「父」や「王」として描かれている点で、他のものに対して何らかの支配的な影響を与えるものであるということがいえるだろう<sup>2)</sup>。続いて、以下の真正断片をみてみよう。

DK22B67 (ヒッポリュトス『全異端派論駁』IX 10)

神 (*θεός*) は昼にして夜、冬にして夏、戦争にして平和、飽食にして飢餓である (すなわち、あらゆる対立相反的なものの意である)。これが変化するのは、あたかも (火) の場合に、香料と混ぜられると、それぞれの (芳香物の) 香りに応じて呼び名がつくのと同様である。

この B67 では、「神」が「昼にして夜、冬にして夏」といった対立関係として明示されているが、ヘラクレイトスにおける「神」の概念に言及するには、先に引用した B30 の「万人にとって同一のものであるところの、このコスモスは (*κόσμον τόνδε*)、神々のどなたかが造ったのではないし…」という一節を考慮しておく必要がある。古代ギリシアにおいて、「神」の概念は人間を含んだ自然世界万有に先立つものであった。しかし、B30 でいわれている一節が示しているように、ヘラクレイトスは人間に先立つ存在である神のあり方として「創造者」というあり方を否定しているのでは

る。では、ヘラクレイトスが想定する「創造者」以外の神のあり方とはどのようなものなのであろうか。B67 において「神」は諸事物の対立関係として明示されているが、この対立関係が創造者以外の仕方では万有と関係を持っているとするならば、それは、何らかの支配原理としての関係の持ち方ということになるだろう。つまり、対立関係として自然万有と関わることによって生成消滅や変化といった諸事物のあり方をつかさどることである。そして、以上のことから、ヘラクレイトスにおける「神」の概念は先に「支配原理」として特徴付けられていた「戦争」や「ロゴス」のあり方と同じ仕方の特徴付けられるものであると考えることができるだろう。

ここまでの議論をまとめると、ヘラクレイトスにおいては「火」という一つの要素に「*κόσμος*」「万物を舵取るもの」「理 (*λόγος*)」「戦争 (*πόλεμος*)」「神 (*θεός*)」という様々な名前が与えられており、これらのものは皆、B67 で「神」が「対立概念」として特徴付けられているという観点から、その内実に関わる一側面として「対立概念的な要素を有していたと考えることができるだろう。では、ここで言われる「対立概念」とはヘラクレイトスにおいてはどのようなものとして規定されているのだろうか。その内実を検討するにあたって、以下の断片を見てみよう。

DK22B51 (ヒッポリュトス『全異端派論駁』IX 9)

そして、万人がこのことを知らず、それに同意しないことを、ほぼこのように非難している。「どうして不和分裂しているものが、みずからと一致和合している (理を一つにしている) のか、彼らには理解できない。逆向きに働き合う一体化 (調和) というものがあって、例えば弓や豎琴の場合がそれである。」

DK22B60 (ヒッポリュトス『全異端派論駁』IX 10)

上り道と下り道は同じ一つのものである。

DK22B62 (ヒポリュトス『全異端派論駁』IX 10)

不死なるものが死すべきものであり、死すべきものが不死なるものである。かのものの死をこのものが生き、かのものの生をこのものが死している。

先ず、B51をみてみると、そこでは「逆向きに働き合う一体化」ということが語られ、その具体的な事例として弓や豎琴があげられている。この弓や豎琴は、両者ともに本体部分に弦をはり、本体と弦のそれぞれが持つ反対方向の力がつりあうことによって弓としての状態、もしくは、豎琴としての状態を維持している。また、B60とB62に目を向けると、そこでも、「上り道と下り道は同じ一つのものである」や「不死なるものが死すべきものであり…」といったことが述べられて、対立する概念が一つの事物のなかに同居し、まさにその「一つのものの中に対立関係が存在している」という事実のゆえにそのものが一つの事物として成立しているということが語られるのである。つまり、「昼にして夜、冬にして夏、戦争にして平和、飽食にして飢餓」といった諸事物の対立関係を描写していたB67は、現実世界における「昼と夜」の対立や「冬と夏」の対立を述べようとしているのではなく、ある種の比喩であり、「神」はこれらの諸事物の対立に象徴される対立関係そのものであるということ述べているのである。そして、以上のことから、ヘラクレイトスにおける「対立関係」とは、単に相反する諸事物の対立関係を指すのではなく、一つの事物のなかに均衡して調和のとれている対立関係が内在することによって、その事物がその事物として成立しているということの意味するところと考えることができよう。本論では、ヘラクレイトスが示すこの特殊な対立関係のあり方をこれ以後「対立要素の一致」と呼ぶことにする。

さて、以上のことから、ヘラクレイトスが自然万有の究極的な原理として示す「火」は、「ロゴス」や「戦争」といった多様な名前を持つものであると同時に、昼や夜などに象徴される対立要素

が一つの事物に同居している「対立物の一致」を体現するものであったと考えることができるだろう。

## 2、人間による原理把握の可能性に対するヘラクレイトスの見解

前節では、ヘラクレイトスが自然万有の原理とみなした「火」について、それが「ロゴス」や「戦争」「神」といったさまざまな名前を持つものであり、その内実としては昼と夜といった対立概念が、相互に矛盾を生じるものでありながら、それでも尚且つ、一つところに同居しているという「対立物の一致」を体現するものであったということを確認した。本節では、そのことを踏まえたうえで、ヘラクレイトスにおいて人間が「火」を把握することの可能性についてどのような見解が取られていたのかを検討する。

### 2-1、感覚に対する信頼と魂の優劣

DK22B1 セクストス・エンペイリコス (『諸学者論駁』VII 132)

理(ロゴス)は、ここに示されているのに、人びとは、それを聞く以前にも、ひとたび聞いてのちにも、けっして理解するようにならない。なぜなら、すべてのものごと(πάντων)は、ここに語られたとおりに生じているのに、彼らはまるでそれを見聞きしたためしがないも同然で、しかも、多くの話や事実を見聞きしながらそうなのだ。まさにそうしたことを私は詳らかにしており、それぞれのものごとをその本来のあり方に従って分明にし、それがいかにあるのかを明示しているというのに。他の人びとには、目覚めてのちに何をしているのかも、さながら眠っている間の行いを忘れていたのと同様に、気づかれていないのだ。

ヘラクレイトスが提示する人間による原理把握の可能性を問題とするに当たって、まず、上に引用した真正断片をみてみると、この断片の冒頭で、

ヘラクレイトスは「ロゴス」を認識対象とした場合の、人間の認識のあり方を述べている。ヘラクレイトスにおいて「ロゴス」は世界万有に行きわたる支配原理である「火」に与えられた名前の一つであるが、その支配原理を対象にした際の人間の認識に対して、ヘラクレイトスは「人びとは、それを聞く以前にも、ひとたび聞いてのちにも、けっして理解するようにならない」と語って否定的な立場を取る。しかし、この断片の後半部では「そうしたことを私は詳らかにしており…それがいかにあるのかを明示しているというのに。他の人びとは…気づかれていないのだ」という仕方、自分自身と他者を対比し、「そうしたこと」すなわち支配原理であるところの「ロゴス」を詳らかにしている自分と、それを理解しない他者という対比構造を明確化するのである。当然のことながら、ヘラクレイトスも人間であり、ヘラクレイトス自身も自分を神のような人間を超越した存在として認識していたわけではないだろう<sup>3)</sup>。つまり、ヘラクレイトスが示すこの対比関係は、同じ人間でありながら、「ロゴス」を認識してそれを詳らかにできる人間と、それを認識できない人間がいるということを主張しているものとして解釈できるのである。

DK22B45 (ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』IX 7)

魂の限界は、それに行き着こうとして、たとえあらゆる道を踏破しても、見つけ出せないであろう。それほど深い理(ロゴス)を、それは持っている。

ヘラクレイトスの学説は、上に引用したDK22B45のような断片に示されているように、それを表面的に解釈すると、人間が諸事物に行き渡る究極的な原理を認識することの不可能性を主張しているものとして解釈されてしまう。しかし、先にあげたDK22B1を丁寧に読んでみると、そこでは、人間の認識能力に対する単純な限界設定は行われていなかったということに気づくだろう。では、ヘラクレイトスはどのような根拠に基づいて、

人間を、原理を認識できる者と認識できない者の二種類に分類したのだろうか。

先にも言及したように、ヘラクレイトスが見出した、原理を認識できる者と認識できない者の区別は、そのまま、自分自身とそれ以外の人びとの区別であった。実際、以下の断片にも見られるように、

DK22B101 (プルタルコス『コロテス論駁』20, 118 C)

私は自分自身を探究した。

ヘラクレイトスは自分自身を探究対象とした自己認識の結果として、自分と他者との間に差異を見出し、人間を二種類に分けたのである。だが、ヘラクレイトスが見出した自分自身と他の人々との差異はどのようなものなのだろうか。

それについて検討する際に、まず注目すべきは、DK22B1の冒頭で、ヘラクレイトスが、「人間はロゴスを解しない」という内容の主張を述べたすぐ後で、「すべてのものごと(πάντων)は、ここに語られたとおりに生じているのに…」と語っている点である。この「すべてのものごと」の中には当然のことながら原理的な要素、即ち、「火(ロゴス)」も含まれているのだが、ここでなされるヘラクレイトスの主張をそのまま受け取るならば、人間の前には原理を含んだありとあらゆるものが示されているにもかかわらず、人間はそれを知ることができないということになる。次に着目すべきなのは、同じDK22B1のなかで、「それを聞く(ἀκούσαι)以前にも、ひとたび聞いて(ἀκούσαντες)のちにも、けっして理解するようにならない」や「彼らはまるでそれを見聞きしたためしがない(ἀπειροισιν)も同然で、しかも、多くの話や事実を見聞きし(πειρώμενοι)ながらそうなのだ」と語り、原理把握の方法として感覚の有効性を述べている点である。このB1で展開されているヘラクレイトスの主張に従う限り、原理的なものをはじめとするありとあらゆるものは、感覚的な経験の前に十全に示されており、なおかつ、人間はそ

れを感覚的には把握しているにもかかわらず、ヘラクレイトス以外の人間はそれを理解できないということになる。そして、このことは同時に、ヘラクレイトスにおいては、人間が原理的なものを把握できない原因は「感覚」以外の要素に求められていたということの意味する。つまり、ヘラクレイトスにおいては、誰に対してであれ感覚的にはあらゆるものが平等に示されているのだが、それにもかかわらず、それらの諸事物を把握できる人間とできない人間がいるということである。では、ヘラクレイトスにおいて、感覚的には把握しているはずのものを認識し切れていないということの原因はどこに求められるのだろうか。それを問題とするにあたって、以下の諸断片をみてみよう。

DK22B107 (セクストス・エンペイリコス『諸学者論駁』VII 126)

目と耳は、その意を解さぬ魂 (*βαβάρους ψυχάς*) をもつ場合には、人びとにとって悪しき証言者である。

DK22B117 (ストバイオス『精華集』III 5, 7)

一人前の大人でも酔うと、どこへ歩いていくのかも分からずに、よろめきながら、年端も行かぬ子供に手を引かれていく。魂を湿らせたからである。

DK22B118 (ストバイオス『精華集』III 5, 8)

乾いた輝きこそ、最上の知を備えた最も優れた魂。  
[あるいはむしろ] 乾いた魂こそ、最上の知を備え、最も優れている。

まず B107 をみてみると、そこでは目と耳という感覚器官と魂が対比され、魂が「意を解さぬ (*βαβάρους*)」ものである場合には、感覚器官が「悪しき証言者」になるということが言われている。ここで着目すべきは、感覚器官の良し悪しの基準が、感覚器官それ自体に帰されているのではなく、感覚器官からの情報を受け取って判断する魂の側に帰されているという点である。つまり、

感覚器官が、DK22B 1 でいわれているように、あらゆるものの情報を魂に十全に示していたとしても、その感覚から提供される情報を判断する魂がそれを正しく解しないがゆえに、人間は自然万有に行き渡る原理を解することができないということである。このことから、ヘラクレイトスにおいては、一般の (ヘラクレイトス以外の) 人間が「ロゴス」を認識できないことの原因は魂に帰されていると考えることができよう。では、ヘラクレイトスが「意を解さぬ (*βαβάρους*)」と主張している魂とはどのようなものなのであろうか。

ここで、B117 と B118 に目を向けてみると、B117 では酒に酔った人間の事例が提出され、本来であれば成熟して優れた魂を持っているはずの大人が、酒に酔ってしまうと、子供に手を引かれて歩いていくということがいわれ、そして、この酒に酔って大人の魂が劣化することの原因が「魂を湿らせたからである」という仕方では説明されている。また、DK22B118 では、DK22B117 でいわれている「湿った魂」の対極に位置する「乾いた魂」が「最上の知を備え、最も優れている」といわれて高く評価されている。以上のことから、ヘラクレイトスにおいて、魂の優劣は、それが湿っているか乾いているかの度合いによって決定されると考えることができよう。つまり、他者が持っている「意を解さぬ魂」とは、ヘラクレイトスにとって「湿った魂」のことを意味するのである。

## 2-2, 「魂」と「火」の結びつき

2-1 では、ヘラクレイトスにおいては魂の状態として「乾いた魂」と「湿った魂」という二通りのあり方が提示され、前者の「乾いた魂」が人間にとって優れた魂であり、後者の「湿った魂」が劣ったあり方であるとみなされていたということを確認した。だが、魂に関する主張としてヘラクレイトスが語っている「乾いた」「湿った」という状態は具体的にはどのような状態のことをいうのだろうか。

この問題について検討する際に注目すべきなのは、1 で引用した DK22B 2 で、「ロゴスこそが遍



きものであり、この遍きものに人間は従うべきである」という仕方では人間のあるべき状態が明示されたのち、すぐさま、「多くの人びとは、自分独自の思慮 (*idían phronēson*) を備えているつもりになって生きている」と語られている点である。この「遍くもの」の内実は、1で言及したように、「ロゴス」であり「火」であり「戦争」であり「対立要素の一致」であり「コスモス」であったが、問題となるのはもう一方の「自分独自の思慮」である。ヘラクレイトスがこの「自分自身の思慮」という言葉でどのようなものを意味しようとしていたのかを特定することは、資料的な関係から実質的に不可能である。しかし、DK22B 2で「遍くもの」と「自分独自のもの（思慮）」が対比されているという事実から推測するに、ヘラクレイトスが、その内実はなんであれ、個別的なものに従うことを避けるべきであるとしていたのは事実であろう。

さて、今、問題となっている「遍くもの」とは1で言及したように、「火」を特徴付ける要素でもあったが、仮にそうだとすれば、ヘラクレイトスにおいて「遍くもの」に従うとは同時に「火」に従うということであると解釈することができるだろう。実際、そのように解釈するならば、ヘラクレイトスが魂のよりよいあり方として「乾いている」というあり方を提示していることにも、「乾いている」という状態がより「火」に近いあり方であるという点から、うなづくことができるであろう。つまり、ヘラクレイトスにおいてよしとされている状態とは「火的にあること」であり、魂に対していわれている「乾いている」という表現は「火的にあること」を象徴的に表すものなのである。だが、ここで考慮すべきなのは、一言で「火的にある」といっても、ヘラクレイトスにおいてこの「火」はその一側面として「対立要素の一致」という面を有していたという点である。それゆえ、「火的にある」というあり方もこの「対立要素の一致」と矛盾するようなものであってはならない。では、ヘラクレイトスにおいて「火」とはどのようなあり方をしているものであり、その「火」に

従う「火的にある」というあり方はどのようなあり方なのであるだろうか。

その点について検討するに際して注意すべきなのは、1で引用したDK22B30で言われている「それは、いつも生きている火として、いつでもあったし、現にあり、またありつづけるであろう——定量だけ燃え、定量だけ消えながら」という一節である。残存するヘラクレイトスの真正断片のなかで「火」のあり方を示しているのはこのB30だけである。これによると、「火」は絶えず存在し続けながらもそのあり方として炎上と鎮火を繰り返しているということが伺える。また、この炎上と鎮火という二つの対立する概念が「火」という一つのものの内に同居しているという意味で「対立物の一致」とも合致するものといえよう。「火」においてはこの「炎上」と「鎮火」という二つの要素が同居しているという点と、「魂」に「乾いている」と「湿っている」という二つの要素が同居しているという点との間に類似性を見出すことは不可能ではないだろう<sup>9)</sup>。そして、このように考えるならば、人間の「魂」は、そのあり方に「火」のあり方との類似性が見出せるという観点から、すでに「火的なあり方」をしているとみなすことができるのであり、その意味で、それは常によいあり方をしていると考えることも可能なのである。実際、ヘラクレイトスの「火」は万有に行き渡る原理であるから、その考えを徹底させた場合、ありとあらゆるものは「火」と同様のあり方をしていると考えられる。そして、そうであるならば、ヘラクレイトスにおいては全てが「火」と同様のあり方をしているという意味で、ありとあらゆるものはよきあり方をしているのであり、そこに好ましいあり方と好ましくないあり方という二つのあり方を読み込むことは不可能になる。だが、もう一方の事実として、ヘラクレイトスは「乾燥の度合い」ということを規準に魂に優劣をつけていた。魂が常に「火的なあり方」をしているという事実と、ヘラクレイトスが人間の魂の状態に優劣を見出していたという事実の相克はどのように考えるべきなのだろうか。

このような相克が生じたおおもとの原因は、DK 22B 2では「対立要素の一致」によって特徴付けられる「火」、すなわち、「遍くもの」に従うことがよきありかたとされていたのに対して、B118では「乾いている」という一つのあり方のみが好ましいあり方とみなされていたという点にある。つまり、B 2の主張に基づいて「魂」のよきあり方を規定した場合、それは「乾いている」ありかたと「湿っている」ありかたの両方が一体となっている状態をよしとしなければならないのに対して、実際に、「魂」の好ましい状態について述べられているB118では対立している両方のものを包含するというのではなく、対立しているものうち一方だけが好ましい状態とみなされているということである。この問題について検討するに当たって注目すべきなのは、DK22B30で言われている「鎮火（定量だけ消えながら）」の概念である。当然のことながら、火が消えてしまった場合、「火」は存在しない。それゆえ、「鎮火（定量だけ消えながら）」とは「火」が火としてあることを妨げるものとみなすことができる。また、それと反対の方向性を持つ「炎上（定量だけ燃え）」の方は、まさしく、「火」が火としてあることを助長するものと考えられることができるだろう。

ここで改めてB 2でいわれていた「遍くもの」に従うという考え方に立ち返ってみよう。すると、この「遍くもの」が「火」であるという観点から、これを「火」に従うと読み替えることが可能であろう。また、このように考えた場合、「火」がそのうちに含む「鎮火（定量だけ消えながら）」という状態は、それが「火」が火としてあることとは逆の方向性を持つものであることから、こちらは人間が従うべきものとしては退けられるべき状態であり、むしろ、人間が従うべきは、「火」がまさしく火としてある「炎上（定量だけ燃え）」の状態であると考えられることができるだろう。このように解釈するならば、B 2とB118で言われていた内容は、どちらもともに対立する両方の要素を包含した一としての「火」に従うことを意味するのではなく、その一つのものが含む相対立する

要素のうちの片一方の要素、すなわち、「炎上」もしくは「乾燥」に従うことを意味しているものと解釈することができる。そして、以上のことから、この二つの断片間で生じた相克は解消されたとみなすことができるだろう。

### 2-3, 乾燥の限界と人間の限界

2-2で検討したように、ヘラクレイトスにおいては人間の「魂」と自然万有の原理である「火」との間に類似性が見出され、「火」がまさしく火としてある状態、すなわち、「炎上」の状態に対応する「魂」の「乾燥」状態こそが、魂の優れた状態として規定されていた。つまり、魂が乾燥状態にあるとき、さらにいえば、乾燥すればするほど、魂はその機能がより高いレベルで発揮されるということなのだが、魂がそのようによい状態にあるとき、人間はどこまで知ることができるのだろうか。2-1で引用したDK22B 1においていわれていたように、ヘラクレイトスは自分自身と他の人びとを比較し、原理を認識してそれを詳らかにしている自分と、原理を解さない他の人びとという仕方では、両者のあり方をその認識能力の観点から明確に区別していた。この場合、ヘラクレイトスにとって自然万有の原理を明確に認識している自分自身の魂は極めて高いレベルで乾燥しているということになるのだろうが、この「高いレベルで乾燥している」とはどの程度の乾燥状態を意味しているのだろうか。

それについて検討する際に考慮すべきなのは、万有に遍く「ロゴス」が「弓」という事例で例えられる「対立要素の一致」であると言われているのと同時に、その「ロゴス」であるところの「火」がB30で「定量だけ燃え、定量だけ消えながら」も「いつでもあったし、現にあり、またありつづけるであろう」とされていた点である。前節でも述べたように、「定量だけ消える」とはまさしく「火」が火としてあることとは真逆の方向性を持つものであった。そして、この「定量だけ消える」という方向性が極点まで到達した場合、それはすなわち、「火が消える」ということを意味する。

このことは、「いつでもあったし、現にあり、またありつづけるであろう」という仕方でも述べられた「火」の恒常性と矛盾する。また、この「火が消える」という極点の状態は「ロゴス」の比喩として語られる「弓」のあり方とも矛盾することになる。当然のことながら「弓」は弓の本体と弦が相反する方向で引っ張り合うことによって成立している。仮に、どちらかの力がもう一方の力を振り切った場合、弓は弓としての形状を維持することができない。「火が消える」状態とは、まさしくこの「弓が壊れる」状態を意味する。ヘラクレイトスにとって、「火」は「ロゴス」でありそれを表すものが「弓」である。それゆえ、ヘラクレイトスが考える相反するものの力関係においては、どちらか一方がその極点に達して、もう一方がゼロになるということはあってはならないのである。このことを「魂」における「乾燥」の考え方に当てはめるとどのようなようになるのだろうか。ヘラクレイトスは人間の魂も「乾燥」と「湿潤」という相反する対立要素が一致しているものと捉えていたが、仮に、この「乾燥」と「湿潤」という二つのうち、どちらか一方が百となった場合、例えばそれが魂にとって好ましい状態とされる「乾燥」であったとしても、それはそのまま魂の崩壊を意味する。ヘラクレイトスがピュタゴラスやプラトンのように「魂」を永続するものと捉えていたのか、それとも、原子論者のように時が来れば崩壊するものと考えていたのかは定かではない。しかし、仮に永続するものと考えていたのであれば、ヘラクレイトスの場合、対立するものの内どちらか一方の力が百になった場合にそれは存続できないのだから、必然的に完全に「乾燥」しているという状態は成立しなくなる。また、原子論者のように崩壊するものと考えていたとするのであれば、完全に乾燥した魂は崩壊するのであり、崩壊した魂に対して「その機能が十全に発揮できる」とか「機能不全を起こしている」といった評価を与えることはできないだろう。つまり、ヘラクレイトスが「対立物の一致」という考え方を有している以上、人間の魂は完全な乾燥状態、すなわち、その機能

が最高度に発揮される状態に至ることはないのである。

そして、このことは同時に、自然万有の原理を認識しているヘラクレイトスの魂の乾燥状態も、その乾燥の度合いは完全な乾燥状態ではなく、そこに一定の湿潤状態を有した乾燥状態であるということの意味する。先にも言及したように、ヘラクレイトスにおいて、魂が完全に乾燥した状態はそのまま魂の崩壊を意味していた。つまり、ヘラクレイトスの魂論においては、人間は自然万有の原理である「火」を認識するレベルまで乾燥した魂をもつことはできるけれども、魂の機能が十全に発揮される状態には至れないとされていた点で、人間というものに明確な限界が設定されていたのである。

### 3、完全に乾燥した魂

#### ～ヘラクレイトスの魂論に「神の知」を読み込む可能性～

2では、自然万有の原理を把握することに対するヘラクレイトスの見解と彼の魂論とを考え合わせ、その結果として、ヘラクレイトスにおいては、人間の魂が完全に乾燥することの不可能性という観点から、人間には魂の機能という点で明確な限界が設定されていたということを確認した。では、ヘラクレイトスにおいて、魂が完全に乾燥した状態は決して実現することのない状態と考えられていたのだろうか。本節では、この問題について、当時のギリシア人たちが抱いていた神の概念との関連性から検討する。

周知のように、当時の人々は、生命の有限性という観点から、「不死なる神」と「死すべき人間」という仕方でも両者の間に明確な差異を設けていたが、この差異は単純な生命の有限性だけに限定されたものではなく、この差異から派生する仕方でも人間の「知」に対する有限性の設定にまで至っていた。当然のことながら、生命において有限な人間は、自分の生前と死後に関する事柄に対しては、それを間接的に聞き知るか推測によって知ること



から、ヘラクレイトスは「知」という面での神と人間との差異を読み込んでいたということが言えるだろう。

ここで、再びヘラクレイトスの魂論を思い出してみよう。ヘラクレイトスは、人間の魂の乾燥状態に、自然万有の原理も認識可能な自分自身の魂よりもさらに乾燥している優れた魂の状態（完全な乾燥状態）を読み込む可能性を想定していた。このようなヘラクレイトスの魂論と、先に引用したDK22B78にみられるヘラクレイトスにおける神と人間との差異のありかたを関連付けることは不可能ではないだろう。つまり、人間の魂にとっては、魂それ自体の崩壊を帰結するという観点から実現不可能であった魂の完全な乾燥状態が、人間を超越した神という領域において、その神の魂のあり方という仕方でも成立しているということである。残存するヘラクレイトスの真正断片中に、本論で筆者が主張しているような、完全に乾燥した状態の魂と神の知とを結びつけることを直接的に主張したものは存在しない。しかし、ヘラクレイトスの学説、中でもとりわけ魂に関する議論と、当時のギリシア人が共有していた神に対する考え方とを考え合わせた場合、本論で提示したような結論を導き出すことも決して不可能ではないだろう。

#### 注

- 1) 本論でヘラクレイトスに関する資料を引用する際の邦訳は『ソクラテス以前哲学者断片集』に収録されている訳に従う。また、本論では、古代ギリシア語フォントを正確に表示することの困難という観点から、注（もしくは本文中）で引用した箇所ギリシア語全文を明示することはせず、必要に応じて部分的に本文中に明示することとする。
- 2) このB53で用いられている「父（*πατήρ*）」という概念には、その子にあたるものを作り出すという意味で必然的に創造者のニュアンスが伴うが、ヘラクレイトスにおいて「戦争」を特徴付けるものとして用いられている「父」の概念はそのような「創造者」を表す概念ではない。実際、B53の後半では「父」という仕方でも特徴付けられた「戦争」が我々世界に及ぼした影響が列挙されているが、それは「あるものたちを神々に列し、ある者たちを人間の列に置いた。またある者たちを奴隷とし、ある者たちを自由人とした」というものであって、これは、創造者の行いというよりも、むしろ、「戦争」を特徴付けるものとして二つ目にあげられた「王」のなす行いである。そして、その行いは、具体的な内容を鑑みた場合、「創造」という言葉で表されるべきものではなく、むしろ、「支配」という仕方でも特徴付けられるべきものである。つまり、ヘラクレイトスにおける「戦争」の概念とは、「万物に先立って存在し、それを支配するもの」なのである。
- 3) ヘラクレイトスの自己評価に関しては、今日までその異質さが伝えられているヘラクレイトス個人の「性格」という学問的な探究の対象にはならない要素が関係してくるため、一概に決め付けるわけにはいかないし、また、自分自身が神であることを証明しようとしてエトナ山の火山に飛び込んだエンペドクレスのような事例が存在することを考えると、ヘラクレイトスが自分を「神」とみなしていなかったという保障はない。しかし、反対にヘラクレイトスが自分を「神」だとみなしていたという証拠も存在しておらず、本論ではヘラクレイトスの自己評価に対して、「自分は他の人間よりもはるかに優れている」という程度の評価だったであろうと推測しておく。
- 4) ここで魂にかけて用いられている *βαρβαρως* という形容詞の本来の意味は、「ギリシア語以外の言葉を話す」というものであり、英語では単に *foreign* という訳語が与えられる場合もあるが、ここでは、このもともとの意味から転じて「言葉が通じない」すなわち「意を解さない」という意味で用いられていると判断して問題ないだろう。
- 5) 時代が下ってデモクリトスにまで至ると、自然万有に広がる秩序であるマクロコスモスに対し、人間が有している魂がミクロコスモスとして語られ、そこにマクロコスモスとミクロコスモスの同調性が読み込まれていたことが明確に見て取れる。しかし、このヘラクレイトスの段階ですでにそのような考え方が存在していたかどうかは定かではない。確かに、今ここで筆者が示した、人間の魂における乾燥と湿潤の関係と、「ロゴス」としての「火」が有している炎上と鎮火の関係をミクロコスモスとマクロコスモスの同調性として理解することも不可能ではないだろう。しかし、残存する資料の中に、ヘラクレイトスが人間の魂をミクロコスモスと明言しているものは存在しない。それゆえ、ヘラクレイトスにおいては、その学説にデモクリトスにみられるようなマクロコスモスとミクロコスモスの

対比を読み込むことには慎重になるべきであろう。だが、ヘラクレイトスが実際に自然万有としてのマクロコスモスと人間の魂としてのミクロコスモスの同調性という考え方を持っていたかどうかは別にして、彼の学説の中に「ロゴス」として万有に行き渡る「火」のあり方と人間の「魂」のあり方との間に類比関係が見出されることは事実である。

- 6) 本論で『神統記』の邦訳を引用する際には『ヘシオドス研究序説』に収録されている廣川洋一訳を用いる。
- 7) 本論で『イリアス』の邦訳を引用する際には岩波文庫に収録されている松平千秋版の邦訳を用いる。

#### 参考文献

- Diels, H. W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker* sixth edition, Weidmann, 1951.
- , 『ソクラテス以前哲学者断片集』 岩波書店, 内山勝利他訳, 1996.
- Hirokawa, Y. 『ソクラテス以前の哲学者』, 講談社, 1997.
- , 『ヘシオドス研究序説』, 未来社, 1975.
- Homer, 『イリアス(上)』, 松平千秋訳, 岩波文庫, 1992.
- Kirk, G. S., E. Raven and M. Schofield, *The Presocratic Philosophers*, 2d ed., Cambridge University Press, 1983.
- Long, A. A. *The Cambridge Companion to Early Greek Philosophy*, Cambridge University Press, 1999.
- Takahashi, N. 『ヘラクレイトス—対話の論理の構築と実践を目指して—』, 晃洋書房, 1995.
- Yamakawa, H. 『古代ギリシアの思想』, 講談社, 1993.